

## 北方領土返還のために

黒部市立高志野中学校 三年 桶屋こむぎ

私の祖母はよく、自分の父親についての話を聞かせてくれます。一年のうち半分は海に漁に出ていることや、ある年の冬、さんま漁から帰ってくる途中、現在の北方領土の辺りで遭難し、亡くなってしまったことなどです。そして、いつも最後には決まって、「(北方領土に)行ってお線香を上げられればいいのにねえ。」と残念そうに言います。現在は、北方領土へは特別な場合ではないと行けないのだそうです。私はこの祖母の話を聞いていて、北方領土についての興味がふくらんでくるのを感じました。そこで、今年の夏休みに行なわれた、富山県少年少女北海道派遣団に参加することに決めました。

八月五日、私はその研修の一環として、「北方領土返還要求運動根室市民大会」に参加させていただきました。予定時間を上回る演説、力のはいった万歳など、北方領土を返してほしいという皆さんの熱い想いを全身で感じる事ができました。ノサップ岬からすぐ間近に見えた島々。かつ

ては、コンブ漁やサケマス漁業などで賑わいを見せていた場所、たくさん日本人の方々が眠るその場所には、現在、自由に立ち入ることはもちろん、近寄ることすらままならないのです。日本本土から生活のための新天地を求め、たくさんの人々が汗を流して開拓してきた土地を、戦争という時代背景の中、強引に手放さざるをえなかったのです。

その後、日本が国際社会に復帰した後、何度か返還にむけて交渉が行なわれてきたようですが、未だ何の進展もありません。それどころか最近のニュースでは、北方領土を本格的に開発しようというロシア側の動きすら見られるようになってきました。今の私たちにできることは一体何なのでしょう。

何年前か、私達の中学校に北方四島からロシアの中学生が来校、交流したことがあります。彼らはとても友好的だったそうです。そして、彼らも自分たちの生活のために、生きていくために北方領土に住んでいるのだと話していたそうです。みんな生きていくために一生懸命です。強制的な力で彼らの生活をおびやかすことがあってはならないと思います。でも、だからといって北方領土をこのままにしてよいというわけではありません。

今私達にできること、していかなければならないことは

二つあると思います。まずは、北方領土がかつては日本人々が開拓してかち得た、日本の領土であること、たくさん日本人の方々が眠っておられる事などをできるだけ多くの人に知ってもらい、関心を持ってもらえるように努めなければなりません。

先日、黒部市で行なわれた「北方領土学習会」に参加させていただいた折に、講師の先生が、「北方領土返還のためには、ねばり強く交渉を続けていくことが大切だから、元島民の方々には健康で長生きしていただかなければならない。」とおっしゃっていたのを聞きました。そして、私は、自分を含む、三世、そして四世、五世の人たちへ北方領土が日本の領土であることを忘れないように語りついでいくことが返還への力ギなのだと思ってきました。そのために、これらのことを、まずは自分の身近な人たちに、そして機会があればその他の人たちにも伝えていく必要があると思います。

それとあと一つは、ロシアの人々にも、日本が困っているということをおわかってもらうことです。積極的に交流に参加し、日本の立場、歴史を理解してもらえよう努力したいと思います。現在生活しておられるロシアの人々の「故郷」をなくすこともあってはなりません。お互い文化、言

葉は違っても仲良く共存できればいいと思います。

最後に、北海道を視察し、気候を含むそのきびしい自然環境を体験したことで、ここで生活していくうえで良好な漁場をもつ北方領土は大変大きな意味を持つということをお身をもって知りました。私も、かつて北方領土に住んでおられた方々を中心に、みんなで希望を捨てずにがんばっていきたいと思います。

## 北方領土への思い

黒部市立高志野中学校 三年 松井 大樹

「北方領土問題」この問題は、僕が今年度一番多く取り組んできた活動であり、この問題についてたくさんのお話を学びました。また、この活動を通して、自分の本当の思いを知ることができました。

主に僕は、北方領土の劇に携わったり、現在の返還運動の状況を調べ、自分になにができるのかを考えてきました。北方領土にいろいろと関わってきたけれど、初めは全く興味を持てずにいました。「自分には全く関係のない問題だか

ら「や「いつかは解決するだろう」という軽い気持ちで考えていました。

しかし、そんな気持ちではこの活動には取り組めない、すぐに気付くことができませんでした。それは、元島民の方のお話を聞いたときです。北方領土での生活のことや、島から逃げてきたときのことなどを熱く語られました。僕は、そのお話での一つ一つの言葉の重さをすごく感じることができました。そして、このお話が北方領土問題を真剣に考える原点となりました。

まず、僕が初めに力を入れた活動として、劇の制作があります。昨年度行った劇をもとにして、北方領土の生活をそのまま再現できるように制作しました。また、途中で合唱も入るため、すごく大変でした。劇や合唱をするうえで、一番大切なことは、その役の心の動きを表すことと、その場の情景を思い浮かべることです。劇は、全員が一つになって初めて成功するものなので、それを最高のものとしたときに、重要なことを三つ学びました。初めに、協力をすることです。劇で、全員が一つになって行うように、北方領土問題にはいろいろな人の協力が必要だということ学びました。次に、知ることの大切さを学びました。この問題に取り組むには、北方領土のことを理解しなければなり

ません。僕はこの劇を通して、島での生活や元島民の方の思いを知ることができました。そして最後に、考えることです。解決に結びつくには、なんといつても自分の考えを持つことが大切です。どのような方法が一番解決への近道になるのか、どうすればこの問題が日本とロシアとの間で大きく取り上げられるのか、などといういろいろな疑問がでてきます。その疑問を自分自身に問い、自分の答えを考えて出すことの大切さを学びました。このように三つのかかせない重要なことを劇から得ることができました。発表でも大成功したので、見ていた人に、この思いが伝わっていると本当にうれしいし、これを機会に少しでもこのことを考えてほしいと思いました。

次に僕が北方領土問題に関わったこととして、総合的な学習の時間で返還運動の状況を調べたことです。僕は、課題を「返還運動の状況を調べ、自分にできることは何かを考える」としました。それは、自分も何かの力になりたいと、強く思ったからです。まずは現在の運動の状況を調べるところから始めました。その結果、たくさんの方の北方領土への訪問があることを知りました。北方領土へ実際に行き、そこでロシアとの交流を深めていくというものです。しかし、そう簡単に解決することは難しいことも分かってきま

した。例えば、現在の島民の方々です。その島民の方々の意見も尊重していかなければならないということです。でも、少しずつの積み重ねで、問題を解決して行ってほしいと思いました。

そしてこのことから、自分のできることを見つけ、考えることができました。まず、署名運動への参加です。いろいろな所で運動が行われていると思うので、その運動へと参加することも方法ではないかと思いました。次に、北方領土問題のことをもっと広めていくことです。僕たちの行った劇などにより、いろいろな人に知ってもらい、活動が大きくなればよいと思います。そのためにも、もっと僕が呼びかけていきたいです。そして最後に、自分ができる活動として、訪問の活動です。もっと日本とロシアとの仲を深めていくためにも、どんどんやっていくべきだと思います。

このようにして、自分ができる活動、自分がすればいいと思う活動はたくさんあります。僕は、自分がいいと思った活動は、とにかく取り組んでいくことが大事だと思います。最後にこの活動を取り組んでみて、どんなにさいなことでもやってみること、それが一番だと思いました。僕は、今以上に「挑戦」を大切にして、いろいろなことに取

り組んでいきたいです。

## 北方領土について学習して

氷見市立西部中学校 一年 荒屋 拓未

僕は、今回北方領土について学習し、北方領土の問題は日本が一日も早く解決しなければならぬ問題だと思いました。なぜなら、この北方領土は日本固有の国だからです。しかも北海道本島に最も近い歯舞群島の貝殻島まではわずか三・七キロしか離れていません。最も遠い択捉島でさえも一〇キロという距離です。こんなに近い島々が日本の領土でないはずがありません。また、歴史的に見ても一九五一年の「サンフランシスコ平和条約」でも択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島は日本の領土になっています。それなのにロシアは未だに不法占拠を続けています。このため今でも返還運動が続けられています。

この活動は戦後まもなく北海道の根室で始まりました。当時の根室町長は島から追われた人を援護したり、連合国司令官に陳情書を出したりと、懸命に努力を続けました。

その結果、今では活動は全国に広がり、日本中の人々が返還を求めています。その証拠に署名運動に署名した人の数は七八〇〇万人を超えるまでになりました。今後ますます返還運動をさかんにし、領土返還の後押しをするためには、まず僕たち若者が北方領土問題についてしっかり学び、関心をもつことが大切だと思います。

ロシアに対する返還運動と同時に日本とロシアの交流活動も行われています。この交流活動で日本人と北方四島在住ロシア人の中で友好が深まってきています。この活動はお互いに理解し合っていくうえでとても大切な活動です。この活動は問題が解決した後もずっと続けられたいと思います。

また、北方領土には富山県から多くの人が移住していたことを知り驚きました。不法占拠により多くの富山県の人々が自分の家を捨て、せつかく作った墓も捨て、生活をも捨てて島を追い出されたことになりました。僕と同じくらいの年の中学生も悲しみながら島を出たはずです。こんなことはあってはいけないと思いました。

僕は北方領土について学習し、北方領土という場所がとても身近になったように思います。それと同時に北方領土に関する問題についても深く考えることができました。

今までは北方領土のことはあまり気にかけていませんでしたが、今度の学習で考え方が変わりました。

北方領土の問題は日本という国にとって大変重要な問題の一つです。だからこそ日本の国民が一つになって取り組んでいかなければならない問題だと思います。これから日本は主張すべきことは主張して一日でも早く領土返還を実現できるようにしなければなりません。

## 北方領土について

南砺市立福光中学校 一年 堀 綾夏

わたしは、北方領土問題について、今までよく知りませんでした。小学校の時に、教科書にそんな問題があると書いてあったような気がしますが、詳しく知ろうともしなかったし、気にも留めませんでした。

今回改めて調べてみると、北方領土の歴史はとても複雑だなと思いました。

第二次世界大戦で負けたとき、日本には何も言う権利がなくなってしまったと思います。それまでの「北方領土は日本固有の領土」というロシアとの取り決めも意味のないものになってしまったのだと思います。また、ヤルタ協定で千島列島の中に北方領土が含まれていると考えていたロシアと、含まれていないと思っていた日本。その食い違いは、決定的です。

日本人のわたしとしては、ロシアの言っていることがおかしいとしか思われません。しかし、現実問題として考えたとき、今、北方領土には、ロシア人が実際に暮らして

るということ忘れてはいけないと思うのです。もし、わたしが今住んでいる所は別の国になるから、どこかに移り住みなさいと言われても、絶対動かないし、どこに移り住めばいいのかも分からないと思います。反対運動をして、戦争になるかもしれません。少なくとも、北方領土に暮らしているロシア人の住む場所を保証してあげなければ、北方領土問題は解決しないと思います。

わたしの母方の祖父は、漁師です。網走を拠点に漁をしていたこともあるそうです。そして、北方領土と北海道の間を航海をするときは、危険なので、できるだけ北海道側を通ろうとして、船底を海底にすってしまったこともあったそうです。それほど、北方領土と日本は近いということ、ロシアの警備が厳しくて日本の船にとっては危険な場所であるということが分かりました。

また、富山の祖父の話によると、北方領土問題で一番被害を受けた北海道の人に続いて黒部や入善などの漁師さん達も被害を受けたそうです。みんな漁をすることができなくて、大変だったんだらうなと思いました。

日本もロシアも、経済水域を広げたいと考えているのだと思います。

わたしは、ロシアと日本が協力して、どちらもよくなる

方法は無いかと考えました。

日本の漁業の技術はとても優れていると祖父が言っていました。そこで、日本は、優れた技術をロシアに提供し、日本とロシアが協力して、北方領土周辺で漁をすることができたらすてきだなと思います。

わたしは、今回いろいろ調べたり、インタビューをしたりして、北方領土問題を人ごとのように考えず、日本人として、真剣に考えていかなければならないと強く感じました。

## 「これからの日本

富山市立水橋中学校 一年 正満 創太

現在の日本には、いくつかの問題があります。その一つが「北方領土問題」です。

僕は、八月に「北方領土を考える東海・北陸中学生のつどい」に参加しました。ここでは、現在のロシアの人々のくらしや、昔の日本人がくらししていたころのことについて学びました。

日本人がいたころには、水産業がとても盛んで、その中でも特に、こんぶ漁が盛んだったそうです。こんぶ漁は、朝早くから行われ、取ったこんぶをさらに干すという大変な仕事でした。しかし、収入は少なく、子どもも働かされて貧しいくらしをしていたそうです。

現在のロシアの人々のくらしも、決して豊かなものではありません。ほとんどの人がアパートでくらし、一戸建ての家に住む人はあまりいません。また、道路も舗装されておらず、車は日本車がほとんどだということです。

このつどいで学んだことを踏まえて、日本とロシア、それぞれの立場で考えてみました。

北方領土は、日本固有の領土だというのが日本の主張です。それは、日本とロシアとの間で結ばれた条約で、北方領土は一度もロシアの領土になっていないからです。また、ソ連によって追い出された日本人のために返還を要求しています。引き揚げ者数が北海道について多い富山県の元島民の話では、ソ連軍によって、樺太で働かされたそうです。

次にロシアの立場で考えてみました。もし、日本がロシアに返還を要求して、ロシアが返したとします。そうすると、現在北方領土に住んでいるロシアの人々は、追い出されてしまうこととなります。これでは、日本がソ連に追い

出された時と同じことになってしまいました。だから日本は、このようなことをしてはいけないと僕は思います。

では、ロシアの人々をできるだけ困らせずに、返還を要求するには、どうしたらよいのでしょうか。

第一に、返還運動を行うことです。僕は、つどいに参加する前までは、あまり北方領土問題に関心がありませんでした。僕と同じように、北方領土問題を知らない人もいると思います。だから、この問題を解決するにはこの問題について、国民が知っていなければならぬと思うのです。そのために、テレビや新聞などを利用して、多くの人に知ってもらうことが大切です。また、二月七日は北方領土の日なので、この日には何か行事を行うとよいと思います。

第二に、交流をすることです。現在の北方領土は、一戸建ての家が少なく、道路も舗装されておらず、車も日本車ばかりという貧しいところです。しかし、舗装されていない道路をアスファルトにしたり、車作りの技術を教えたりするなど、日本が協力できることがあると思います。また、北方領土だけでなく、ロシアに対しても協力できることはあります。そうした協力をすることによって、日本とロシアがより友好的な関係を築くことができるはずです。このように、ロシアと友好的な関係を築くことが返還への第一

歩になると思います。

第三に、交渉を続けることです。日本がロシアに協力することによって、平和条約が結ばれるかもしれません。結ばなくても、少しずつ北方領土を返してもらったり、ロシアの人と北方領土で共同生活をしたり、そのことによつてさらに友好的になり、北方領土が返還される日が来るかもしれません。

このように、返還を要求するには、時間がかかると思います。それでも、日本とロシアの間に友好的な関係を、築くことが最も大切だと思います。僕たちは、ロシアに限らず他の国とも友好的な関係を築き、これからの日本を創り上げていかなければならないと思います。



## 日本固有の領土である北方領土について

黒部市立桜井中学校 二年 九里 大和

ぼくは学校で北方領土のビデオを観て、まず「北方領土」と言われる島々を家の大きな日本地図でじっくりと見てみました。大きな四つの島々からなる日本固有の領土として地図には書きこまれていました。両親に北方領土についての作文を書く事を話したところ、父がぼくが生まれる少し前に黒部市と根室市の姉妹都市交流事業で根室市を訪問し、納沙布岬から一番近い貝がら島を見てきた事や北方領土に暮らしていた人たちが多くいたことなどを聞かせてくれました。

ぼくは、なぜこの島が日本固有の領土と言われているのに現在ロシア領土になっているのか大きな疑問をもちました。それも両親に話してみると、太平洋戦争末期の八月に、ソ連が日ソ中立条約を破って満州や樺太に侵攻し、その時に今の北方領土も占領して現在まで続いている事を聞かされました。また、その時に北方領土にいた島民たちが命かながら北海道に引き上げてきた事、その人たちの中に黒部

から四島に渡って暮らしていた人たちが多く、その人たちが根室市に多くいたので、黒部市と姉妹都市になった事も教えてくれました。

今のぼくではかつての戦争の深いところまではわかりませんが、歴史の事実として北方四島が日本固有の領土であることが、学校で見たビデオと両親の話で大体わかることができました。そしてこの固有の領土の返還運動が黒部市をはじめ、県民そして全国民に広がっていることも改めて知りました。学校生活をしている時は北方四島のことを考えることはありませんでしたが、今回のことから北方四島の返還を求めていかなければならないと思いました。過去のことを事実として受けとめることが大切ですが、過去にとられすぎてロシアとの友好関係を築いていけないようではだめだと思います。ぼくが部活動でやっているバスケットボールでは、アメリカのNBAにもロシアやソ連であった国の選手が所属しています。スポーツを通じたロシアとの友好関係も大切だと思います。また日米のような経済的なつながりを日口でも積極的に行っていけば、日本とアメリカのような友好関係を作っていけるのではないかと思います。

ぼくもこれを機会に北方領土のことをもっと深く、広く

知りたいたいと思いました。日本人でもロシア人でも人と人との間には必ず友好関係を築けると思います。その中で、日本固有の領土の北方領土を返還してもらえ活動をしなればならないと思います。両親との話の中で「アメリカは沖繩や小笠原を一時占領していたが返してくれた。いずれロシアも返してくれると思う。しかし、返還を強く思い積極的に活動しなければならぬのではないか。」と言っていました。ぼくも常にそのことを心がけていきたいと思いません。

## 北方領土学習をして

黒部市高志野中学校 三年 長谷川 梓

私は北方領土の学習をする前まで、まったくと言っていいほど北方領土問題に関心、興味がありませんでした。しかし、総合的な学習の時間で北方領土の劇や個人新聞などを作るために、図書室の本やインターネットなどで調べ学習を進めていくうちに、これから生活していく上で、とても大切な問題だと思うようになりました。

二期に入ってから私たちは三年生は、昨年の先輩方が創作した「ああ我が故郷北方領土」の劇を、北方領土のことを知らない人にも、より理解してもらうために、私たちなりにリメイクしました。リメイクするにあたって気をつけたことは、いかに、北方領土問題の大切さを伝えることができるかです。劇の初めに、北方領土について軽く説明を入れたり、役者のセリフに細かい説明を入れたり、思いついたことはどんどん劇中に組み込んでいきました。そうすることで観客のみなさんだけでなく、三学年全員が北方領土問題に関心をもつようになりました。

私が劇を作っていくなかで気になったことは、「北方領土問題の風化」です。確かに普段生活していても返還運動などのニュースも聞かないし、新聞でも北方領土問題の記事も見ません。これでは、日本人ですら北方領土問題を知らない人が多数いると思います。たとえ知っている人がいたとしても、深く知らない人ばかりでしょう。でも私は、この北方領土問題は日本人ならば知らなければならぬことだと思っています。自分たちの故郷が突然他国に占領され、住みなれた土地にもう一生戻れない悲しみは、私たちにははかり知れないほどの想いです。しかしロシアの占領から早六十余年がたち、結局あの不法占領から一度も故郷に帰

ることができぬままに、亡くなられた方も多いのです。ただ運動をさせている方も、もう若い方ばかりではありません。そんなときだからこそ未来を作っていく若者たちが北方領土問題を知り、島民の方々の意思を受けついで、より活発な返還運動を推し進めなければならぬと考えています。簡単なことではないということは分かっているけれど、どれだけの島民の方をもう一度北方領土に帰すことができず、今の北方領土問題の大切な課題だと思えます。

そしてもう一つ気になったことは、今北方領土に住んでいるロシアの方々が、北方領土を自分たちの故郷だと誇りを持ち始めているということです。最初そのことを知ったとき、「何で!？」と思いました。何故不法占領したにもかかわらず、ロシアの人たちは自分たちの土地だと誇りをもちはじめたのが不思議でなりません。でもよく考えれば、占領したのは六十年以上も前で、若い人たちがらば、その島がもう自分たちの「故郷」となっているのです。さつきも書きましたが、故郷がなくなるというのはとても悲しいことで、もし日本に北方領土が戻ってきたら、今北方領土に住んでいるロシアの人々は、どうなるのだらうと少し不安になります。ロシアの人たちのなかにも、六十数年前の島民の方と同じ想いになる人は必ずいると思

ます。その問題を考えていて、私がパツとおもいついたことは、とても単純なことですが、日本人とロシア人が共に生活するということです。今は返還運動の一環として、ロシアと日本の交流も盛んで、互いの心の距離も縮んできているはずですが、一度総合の時間に、交流の様子のビデオを見る機会がありました。一緒に食事をしたり、遊んだりして楽しい時間を過ごしているように見えました。特に子供たちの表情はイキイキしていて、将来的に私の考えていたことが百パーセント無理なことではないのかなと思えました。国どうしの関係などもあつてなかなか難しいことだとは思いますが、この方法は両島民の心を傷つけず北方領土問題を解決する中の一つの方法だと思います。どちらかが心に傷を負ったり、不満を感じたままでは完全に解決したとは言えないでしょう。完全に両島民が納得できるような方法はまだあると思うので、調べたり考えたりしていきたいです。

北方領土問題は元島民の方ばかりが頑張ってもだめで、日本人全員が手をつないで解決に向かわなければならぬ問題です。全員が北方領土を知り、問題と正面から向きあつていけば、いつか必ず解決の光が見えてくると思います。その日まで北方領土問題について、もっと深く考え、みん

なが納得できるような解決への道を探していききたいと思  
います。

## 研修で知った「北方領土問題」

黒部市立宇奈月中学校 一年 初谷 七海

八月二十一日から二十四日まで、私は、北海道で開かれ  
た、「北方領土研修会」に参加した。北方領土問題について  
は、小学校五年生のころに一度教えてもらったきりで、く  
わしいことはほとんど知らなかった。というより、当時の  
私は「社会問題」というものにあまり興味がなかったため、  
教えてもらった以上は追究しようとしなかったのかもしれない。  
そんな私がこの研修会に参加したきっかけは、地理  
の時間、教科書のすみに小さく掲げられていた、北方領土  
についての短い説明だった。その文は、『北方領土は現在ロ  
シアに占拠されています。』という簡単なもので、私はその  
時、「北方領土問題って、こんなに短く説明できるものでは  
ないんじゃないか？」と疑問に思ったのだ。

研修会の初日は、納沙布岬に行った。

「なぜ、北方領土のことを勉強しに来たのに、岬になんか  
行かないやならないの。」

と、不思議に思ったが、現地に着いたとたん、圧倒された。  
目の前には海が広がり、すぐ近くには島がある。

「あれは、北方四島の中の齒舞群島の貝殻島です。ここか  
らあの島まで、わずか三・七kmしかありません。」

三・七kmといえば、車で五分ほどの距離だ。正直驚い  
た。ここまで近い島が日本でない。そしてそのことを私は  
知らなかったんだ……。自分の目でそんな現実を見たことが、  
体を震え上がらせた。きっと、私の周りにいる友達も、親  
も、北方領土がこんなに身近な島だということは知らない  
のだろう。身近だからこそ、一刻も早く解決しなければな  
らない問題なのだと、そこで初めて思った。

納沙布岬へ行った後は、二日間にわたって行われる、「北  
方領土研修会」に参加した。会場となる中学校の体育館は、  
すでに大勢の人がつめかけていて、少し驚いてしまった。  
まずは基礎知識から、最終的には元島民の方の話の聞くと  
いう流れでたいへんわかりやすかった。

私が一番疑問に思ったこと、それは、北方領土はロシア  
と日本、どちらのものかということ。それがはっきりとわ  
かれば、問題だってすぐ解決できるんじゃないのかな、で

も、今まで解決できていないのなら、少しあやふやになっているのかも、と考えをめぐらせながら、研修に臨んだ。

話を聞いたり、資料を見たりしているうちに、その疑問はだんだんと解かれていった。一九五一年に結ばれたサンフランシスコ平和条約では、北方四島は確かに日本固有の領土なのである。にもかかわらず、ロシアはそんな日本の領土を不法占拠し、自分たちの領土だと言い張っている！誰が聞いても、きつとおかしいと思うだろう。実際に、私は自然に怒りがわいてきた。たくさんの人々が、無理やり故郷を奪われ、無念にも亡くなっていったのだろう。

更に、元島民の方の話を聞くと、故郷から追い出された後は捕りよとしてとらえられ、半年以上も強制労働をさせられていたと言う。故郷を奪われたうえに、自分の祖国まで見ることができなかった苦痛はどれほどのものだったか。そして今、そんな苦痛を乗り越えて日本に帰ることができた人たちは、故郷の地でまた暮らせることをどれだけ強く願っているか。心にひしひしと伝わってきた。そして、私の北方領土への意識を、一層高めることができた。

私はこの研修会で、ロシアの人は冷たい、と決めつけてしまった。なぜなら、たくさんの苦しみを多くの人に与え、北方四島を返してくれないから、という単純な考えばかり

しか頭になかったからだ。だから、最終日に行った『北方四島交流センター』では驚きの連続だった。

まず、北方四島に住むロシア人のビデオを見た。ほ装されていない道路を笑顔で渡り、カメラに向かっても満面の笑みを向けるロシアの人たち。その顔には、冷たさなど一つもない。そのビデオで、ナレーターはこう話していた。

『島に住む人たちは、この島が日本のものになることで、自分たちが追い出されることを心配していません。』『そんなことはしない。この人たちと仲良くしたい。』、そう思った。

そうなんだ、この北方領土問題は互いにいがみ合うものではなく、和解し合いながら解決するものなんだ……。本当に初めて、そう思った。北海道での研修は、そんな温かな思いで幕を閉じた。

北海道から帰って来た後、私は自分の知らない取り組みを、県がしっかり行っているのを初めて知った。ビザなし交流や出前講座。驚くほど多くのことを実行していることを、前の私は知らなかったのだ。

私は思う。今、まだ多くの人々は、北方領土についての考えが浅い。それは、問題を知る機会を知っている人が少ないからだ。私は考えた。これからは自分が、問題解決の輪を広めるために尽くさなければならぬ。一人の力は小

さくても、たくさんの人が力を合わせれば、問題解決への大きな一歩になる。その大きな一歩をつくり出すために、私はがんばろう。北方領土問題の、一刻も早い解決を目指して…。

最後に、このような機会をあたえてくださった県職員の方々、先生、および関係者のみなさんに感謝したい。

## わたしの故郷と北方領土

氷見市立西部中学校 一年 南 さくら

わたしは、「北方領土問題は日本全体の問題と言っても過言ではない。わたしたち若い世代にとっても大きな関係がある。」と思います。みんなが真剣に北方領土問題に取り組めば、いろいろなことが変わっていくと強く感じています。わたしがこう考えるようになったのは、わたしの住んでいる富山県と北方領土に深いつながりがあると知ったからです。

わたしは、これまで何気なくテレビや新聞で北方領土問題のニュースを見ていました。ニュースを見る機会は何度

もあったのですが、「日本の領土なのだからロシアも返せばいいのに。」「日本も、もっと強く言えばいいのに。」という程度にしか思っています。わたしには関係ない。」という考えが強かったのです。北方領土問題はわたしにとって他人ごとだったのです。

しかし、わたしのふるさと富山県は、北方四島からの引揚者が全国二位であること、また、北方領土の島の中に越中村が存在すること、島民はよく働き、こんぶ漁をしていたこと、島には二つの学校があったこと、など多くのことを知りました。北方領土と富山県はたくさんの接点があり、現地へ渡った人たちの努力を知って、わたしにも関係ないわけではないと強く思うようになりました。と同時に、関係ないと思っていた自分が恥ずかしくなりました。

わたしは北方領土と富山県のつながりはまず、魚とこんにぶにあると思います。こんにぶや魚の豊富な北方領土へ移り住んだ富山県民は「真面目によく働く」と言われていたことを知り、自分のことではないのにとてもうれしかったです。こんにぶ漁が、わたしたち富山県民によって開拓され、発展したと知り、とても驚きました。自分たちの先輩が、北方領土の島でしっかり根をおろし、生活しておられたのだと感動しました。北方領土は、自分にとっても身近

な土地になりました。

北方領土問題解決のためにわたしのできることは何なのか、まだよく分かりません。でも、まず北方領土と自分とのつながりに気づき、関心をもつことが大切なのではないかと思います。わたしたち若い世代が北方領土に関心を持ち、粘り強く返還運動をしていかなければならないと思います。特に富山県人である自分は努力すべきだと思います。

